

（２）鳥 類

2025 年版レッドリストに掲載された鳥類のうち、新たにリストに掲載された種について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種および愛知県ではリスト外または評価対象外となったが環境省のレッドリストに掲載されている種についても、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。

【 掲載種の解説（鳥類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を評価対象個体群毎に各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2020」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【評価理由】

対象種の愛知県における絶滅のおそれの程度を評価した理由について記述した。

【形 態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献のうち、代表的なものを、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* Swinhoe**【評価理由】**

本州中部以北で繁殖する夏鳥で、愛知県では主に渡りの季節に通過する個体が見られるだけで、繁殖の確認例はなかった。沿岸部の埋立てや干拓地の開発が盛んになった 1970 年代後半からここに繁茂するヨシ原で繁殖が確認されるようになったが、湿地のヨシ原面積が減少した 2010 年代の半ば以降は繁殖が確認されなくなり、通過個体も激減したため繁殖個体群は絶滅、通過個体群は絶滅危惧ⅠA類と評価された。

【形態】

全長約 13.5cm と小型で雌雄同色。上面が褐色で下面は白く脇は淡褐色。顔には白色の眉斑がある。囀りはオオヨシキリより金属的な高音で動きも軽快である。細いヨシの茎の先で上を向いて囀り、長時間囀ることも特徴である。春は 3～5 月、秋は 8～10 月に渡るが、河川敷や水路などの草地を通過することが多いので姿での確認は難しい。春秋共囀りや地鳴きをするので、声で確認されることが多い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

県内を通過する個体は主に平野部のヨシ原や水田、草地や灌木林などで見られるが、体が小さく動きが早いので地鳴きや囀りが聞かれなければ確認することは困難である。県内では沿岸部の埋立地および干拓地、尾張南部の湿地群、茶臼山高原などで繁殖期の記録があるが、近年は渡りの季節でも確認数が激減している。

【国内の分布】

夏鳥として本州中部以北から北海道までのヨシ原や高原の牧場、灌木林などに飛来して繁殖する。春秋の渡りの季節には国内各地で観察されているが、国内では熊本県で繁殖したという記録もある。

【世界の分布】

中国東北部から東南部、サハリンなどオホーツク沿岸部および日本で繁殖し、中国南端からベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、スマトラ北部で越冬する。世界ではアジア東部のみに分布する小鳥である。

【生息地の環境／生態的特性】

本州中部以北や北海道の平地または山地の草原や湿原で繁殖する。なわばりを持ちヨシやススキなどの草原で営巣する。ヨシ原に営巣するオオヨシキリよりは乾燥した環境を好む。草原の中でもより高い草の天辺で囀ることが多く、オオヨシキリより金属的で細く高音の美しい声で長時間囀ることも特徴である。ヨシやススキ、ヨモギなど数本の茎の間に枯れ草で碗型の巣をつくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

古い記録では県内の繁殖記録が無く春秋の渡りで通過する旅鳥とされていた。県内では伊勢・三河湾沿岸で、埋立てや干拓地内の開発が進められた 1970 年代の後半から繁殖期の生息が確認されるようになり、1979 年に汐川で初めて繁殖が確認された。1980 年代から 2000 年代半ばまでは埋立地や干拓地の塩田跡などで繁殖していたが、これらの環境の開発が進むと共に姿を消している。

【保全上の留意点】

かつて愛知県内には鍋田干拓周辺をはじめ汐川干潟、藤前干潟、境川河口干潟、一色干潟、一色塩田跡など国内有数のシギ・チドリや水鳥の生息地として国内でも希有な環境が存在しており弥富野鳥園などの保存施設が建設され、藤前干潟や汐川干潟のラムサール条約指定などの努力も実施されてきたが、種別の保全対策も求められる。

【特記事項】

本種は関東以北の湿地や高原に生息する小鳥である。中部地方では富士山麓の朝霧高原などで見られ愛知県では繁殖しない種であったが、県内では沿岸部の埋立てや干拓地の開発が進められた僅かな間だけ繁殖が確認されている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料Ⅳ, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ヒバリシギ *Calidris subminuta* (Middendorff)**【評価理由】**

毎年主に秋から冬にかけて少数が確認される小型のシギである。県内の沿岸部で埋立てが進められていた頃は、泥砂でできた浅い湿地や、作付けの無い水田で他の淡水系シギやチドリと共に見られたが、2010年代後半になると埋立地は乾燥化し、休耕田の転作により湿地環境が無くなり飛来数が激減したことから、愛知県では通過個体群は絶滅危惧ⅠA類と評価された。

【形態】

全長 14cm の小型シギで、夏羽では背や胸が黄褐色で黒斑があり、冬羽では灰褐色で黒斑がある。脚や脚指が長く大きいのが特徴で、柔らかい泥の上を歩くのに適しており、英名を Long-toed Stint と呼ばれる。鳴き声は小声でプリリ、プリリなどと鳴く。

【分布の概要】**【県内の分布】**

主に木曽川・長良川の河口周辺、矢作川・矢作古川の河口周辺、豊川・汐川の河口周辺などに飛来する。平野部では河川中流域の水田や河川敷などでも春秋の渡りの季節や越冬期の記録があり、内陸の平野部を流れる水路でも越冬期の確認記録がある。

【国内の分布】

北海道から沖縄までの各地に旅鳥として渡来し、沖縄では少数が越冬する。

【世界の分布】

シベリア南東部で繁殖し、インド東部から東南アジア、オーストラリアの沿岸部等で越冬する。アメリカ大陸に分布するアメリカヒバリシギは亜種とされていたが、形態がかなり異なることから、これを別種とする説もある。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟や汽水の湿地で見られることもあるが、本来は淡水の湿地を好むシギである。基本的に 1 羽か 2 羽で生息するが、埋立地や干拓地の水田から湿地環境が減少した 1980 年代後半から 2010 年にかけては一カ所で 10 羽を超える個体が観察されたこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

2010 年代後半以降は飛来数が激減しており飛来場所も限られている。その大半は 1 羽の記録である。減少の最大要因は淡水湿地の環境が激減していることである。

【保全上の留意点】

県内から淡水湿地が消失していることがヒバリシギを代表とする淡水湿地性のシギ・チドリや水鳥が減少している最大の要因であることから、淡水性のシギ・チドリが生息できる環境を再生することが重要である。

【特記事項】

シギの仲間は識別が困難で、1970 年代までは有効な図鑑さえも無い時代であった。愛知県には鍋田や汐川などの観察適地が残されており、中でもヒバリシギのような識別が困難な淡水系の小型シギの識別に大きく寄与してきた歴史がある。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料Ⅳ, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

チゴモズ *Lanius tigrinus* Drapiez

【評価理由】

生息数の少ない種で、県内では渡り時に通過する旅鳥である。春は5～6月秋は8～9月に記録されるが確認例は極めて少なく、環境省では絶滅危惧ⅠA類に指定されている。県内では渡りの季節に名古屋市などの都市公園で稀に観察されていたが、1980年代以降は県内全体でも10年に一度1羽以下の確認と激減しているため、通過個体群は絶滅危惧ⅠA類と評価された。

【形態】

大きさはモズより小さい17～18cm。背から尾にかけては赤褐色で背には鱗模様がある。雌雄とも過眼線は太く黒いが、雌はやや淡い。頭上から後頸にかけて薄い青灰色であり、喉から胸や腹は白く脇には横斑がある。頭の薄い青灰色から他のモズの仲間との識別は容易である。鳴き声はモズより強く濁った声で「ギチギチギチ…」と鳴く。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内での繁殖は確認されていないが、渡りの季節には名古屋市の都市公園をはじめ県内各地の都市公園などでも確認記録がある。繁殖期以外は単独で生活することや、その数も少ないことから自然環境の河川敷や低山の藪の中を渡っていると考えられるが、観察される機会は稀である。

【国内の分布】

本州の中部以北で繁殖する生息数の少ない夏鳥である。渡りの季節には日本海側の島嶼で見られることが多く、かつては毎年のように春と秋に確認されていたが1980年以降は激減しており、繁殖個体数も激減している。

【世界の分布】

ウスリーから中国南部、朝鮮半島、日本の本州中部以北で繁殖し、中国南部やマレーシア、スマトラ島、カリマンタン島北部などで越冬する。世界では東アジアに少数が分布している。

【生息地の環境／生態的特性】

低地から低山の広葉樹林、針広混交林や都市郊外の雑木林などにある木の枝に営巣して繁殖する。営巣地では番いあるいはヒナを含む家族群で生息するが、繁殖期以外は群れにならず番いか単独で見られることが多い。繁殖環境はモズより樹木の多い環境を好み、渡りの季節には公園や人家の庭木で観察されることも多い。春は5月、秋は8月下旬から9月上旬の記録が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内の繁殖数は不明であるが、繁殖が確認されていた岐阜県・神奈川県・東京都・宮城県では繁殖が確認されなくなったことが知られており、国内の繁殖分布が縮小していることは明らかである。減少の要因としては開発等による生息環境の消失だけでなく、托卵鳥であるカッコウの存在も推測される。モズは夏鳥であるカッコウの渡来前に1回目の繁殖を終えているが、夏鳥であるチゴモズではそれができない。

【保全上の留意点】

愛知県では通過個体群のみ確認されているので保全対策の想定も困難であるが、過去に観察された場所や環境の特性について再検証を行い、その環境の保全や再生を試みることは必要と思われる。他の絶滅危惧種についても同様の試みを行うことが、絶滅危惧種を絶滅から守る最善策と考える。

【特記事項】

カッコウの托卵によるモズ類の繁殖に対する脅威は予想を超えるものである。豊根村の茶臼山高原で確認されたモズの巣内の卵が全てカッコウのものであったという記録もある。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

アカモズ *Lanius cristatus* Linnaeus

【評価理由】

繁殖期の観察記録はあるものの県内での繁殖は確認されておらず、愛知県では耕地や河川敷の疎林で春秋に記録される旅鳥である。以前は同じくモズ科で国の絶滅危惧ⅠA類のチゴモズより遙かに確認記録数は多かったが、近年急激に確認数が激減しており2000年以降は殆ど記録が無くなっていることから、通過個体群は絶滅危惧ⅠA類と評価された。

【形態】

モズと同じ大きさで頭頂から背と腰や尾までの上面は赤褐色で翼は黒褐色、嘴は黒色。顔から胸は白く胸脇から腹は淡橙褐色であり、顔には太く黒い過眼線とその上に太く白い眉斑がある。雌雄ほぼ同色であるが雌は眉斑が細く全体の白や黒の色が不明瞭で胸脇や腹は鱗模様である。亜種には色の薄いシマアカモズや翼の黒いカラアカモズもあるが、いずれも日本海側で見られる亜種で、愛知県で見られる可能性は低い。

【分布の概要】

【県内の分布】

渡りの季節は県内全域で報告されているがその数は少なく、殆どが1羽の記録である。確認記録が少ない理由として、繁殖期以外は単独で行動することにより確認される機会が少ないこと、モズとの識別ができる観察者が少ないことが挙げられるが、都市公園や民家の庭木より広大な農地や河岸に立つ樹木を好むことにも依る。

【国内の分布】

繁殖地は北海道や本州中部以北の平地や高原にある牧場のように開けた草原にある疎林の環境である。都市化や温暖化により国内からこうした環境が消失する傾向があるため、国内の繁殖分布も減少している。

【世界の分布】

アジアのシベリア南部から中国南部や日本で繁殖し、インドから中国南端、インドネシアやフィリピンで越冬する。アジア東部に分布するモズであるが、他の種と比較すれば分布の範囲は広く、4亜種がある。

【生息地の環境／生態的特性】

低木のある牧場のような草原、明るい林、公園などに生息し低木に枯れ枝や細根、枯れ葉などで皿型の巣をつくる。繁殖期は番いや家族群で生活するが、春の渡りでは番いで行動することがあるものの、それ以外は単独で行動する。渡りの季節も広い農地や河川周辺の疎林や木立で見られることが多く、大半は1羽の記録である。モズとの識別ができない場合は見逃されていることが推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内では北海道や本州中部以北で繁殖しているが局所的である。開発や温暖化で生息環境は消失しているが、アカモズの生息環境は夏鳥で托卵鳥のカッコウの生息環境と似ているため托卵による影響が大きいことが推測される。留鳥のモズであればカッコウの飛来前に1回目の繁殖を終えているが、夏鳥であるアカモズではそれができない。

【保全上の留意点】

県内で繁殖できる環境があるのは面ノ木園地周辺や茶臼山、池の平などの高原と思われるが、近年の温暖化に加え牧畜産業の衰退や観光化による開発が進められている。同様の環境に生息する絶滅危惧種の数も多いことから、こうした環境の保全と環境の再生が愛知県の生物種保全に大きな効果をもたらすことに注目して今後の環境保全政策に活かしていくことが重要である。

【特記事項】

カッコウの托卵によるモズ類の繁殖に対する脅威は予想を超えるものである。豊根村の茶臼山高原で確認されたモズの巣内の卵が全てカッコウのものであったという記録もある。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

クロツグミ *Turdus cardis* Temminck**【評価理由】**

ツグミの仲間では標高が低い環境でも繁殖する種であったが、こうした個体がいなくなり、標高が高い環境での繁殖個体も激減している。春の渡りでは平野部や沿岸部でも囀りを聞くことができたが、近年は殆ど無くなっている。減少の要因は不明であるが、県内全域に分布を拡大している特定外来生物であるソウシチョウの存在が考えられる。このことから愛知県では繁殖個体群は絶滅危惧ⅠA類、通過個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

国内に生息するツグミ属の中では最も小さく、ツグミより小さくて嘴は黄色。雄は白に黒い斑のある腹面以外は全身黒色、雌は雄の黒色の部分がオリーブ褐色で白い眉斑があり、下顎も黄色。腹部の脇は橙褐色である。飛翔時の雄は下雨覆が暗色、雌は橙色であるのも識別のポイントとなる。雌雄共黄色いアイリングがあるが、雄の方が目立つ。

【分布の概要】**【県内の分布】**

5月から7月に低山の山麓から標高の高い山地にある林地まで広く繁殖していたが、近年は低山での繁殖が激減しているようである。春の渡りは4～6月で平野部の緑地でも囀ることが多い。秋の渡りは8～10月であるが、タカの渡りのコースではタカの渡りのピークより少し遅れて見られることが多い。

【国内の分布】

夏鳥として北海道から九州までの広葉樹林や針広混交樹林で繁殖する。渡りの季節は全国各地で確認できる。西日本の一部では越冬期の記録もある。

【世界の分布】

日本と中国中部でのみ繁殖し、東南アジアの大陸北部でのみ越冬する。世界でも東アジア中南部の一部にのみ分布する、世界的にみても希少な渡り鳥であるといえる。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖場所は標高に関係無く明るい林に生息し、囀りは複雑で長く美しく鳴く。国内の三鳴鳥はウグイス、コマドリ、オオルリとされているが、これらより遙かに良い声で鳴くのにここに入っていないのは、体が大きく飼育鳥としては不向きであったからと思われる。特に春の渡りでは海岸でも都市部でも美しい声で囀るので、その鳴き声が分かれば見逃すことは無い。

【現在の生息状況／減少の要因】

ツグミ属の繁殖環境は高緯度あるいは標高の高い原生林が一般的であるが、クロツグミだけは特別で比較的身近な山麓でも繁殖していた。近年囀りの声が似ている特定外来生物であるソウシチョウの生息分布が拡大した場所からは姿を消す傾向が見られ、特に標高の低い繁殖地ではその声を聞く機会が無くなった場所も多い。

【保全上の留意点】

標高に関係無く明るい雑木林や針広混交林を好むので、こうした環境の保全は大切であるが、近年同じ環境で一年を通して最優占種となっているソウシチョウとの競合が最も大きな問題となっている。

【特記事項】

愛知県内でソウシチョウの分布が確認されたのは2000年の段戸裏谷であった。その後数年で県内の山麓部まで広く拡散して今に至っている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

コクガン *Branta bernicla* (Linnaeus)

【評価理由】

本種は内湾でも広い海域に面した伊勢・三河湾の磯に生息する数の少ないガンである。確認場所の多くが渥美半島であり、稀に知多半島や三河湾の西三河沿岸部の磯にも飛来する。近年三河湾の佐久島でも越冬が観察されているが、その数は多くても3羽、内湾では全て1羽である。2000年以降は一度の確認例があるだけで、愛知県では越冬個体群は絶滅危惧ⅠB類と評価された。

【形態】

体長61cmとガン類の中では比較的小型である。雌雄同色で頭から胸と体の上面は黒褐色。頸に白い輪があり、脇や下腹、下尾筒は白く嘴と脚は黒い。ガン類の中で配色の似ているシジュウカラガンに比べればかなり小さく、白色の部分の形や位置の違いで識別は容易である。生息場所の似ているクロガモやビロードキンクロなどのカモ類とは大きさや首の長さなど体型が異なる。

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾に面した磯や島嶼で少数が見られる。1931～42年には佐久島周辺で100羽程の群れが見られたが、1970年代後半以降は多くても1～3羽の記録となっており、渥美半島や知多半島の伊勢湾岸の他、佐久島や西尾幡豆の三河湾岸の記録が多い。

【国内の分布】

冬鳥として主に本州中部以北と北海道に飛来する。本州中部以南でも少数が見られるが、海水に依存して生息するため湖沼はあっても海に接していない県や地方に飛来することは殆ど無い。

【世界の分布】

ユーラシア大陸、北アメリカ、グリーンランドの高緯度にあるツンドラ地帯で繁殖し、中緯度のユーラシア大陸や北アメリカの沿岸部で越冬する。3亜種があるが全て北半球に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

草食性で干潮時に岩礁に付いた海苔や干潟のアオサなどを採餌する。満潮時は沖で休息することが多く、淡水の池沼や水路に入ることは殆ど無い。草食性のカモ科の多くは湖沼や水路の水草や、耕地の植物などを食べるために内陸の淡水域と海域の両方に生息するのに対し、コクガンは海域だけに限って生息する特別な種といえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

伊勢・三河湾に面した磯や島嶼に生息する。渥美半島で多く確認され、稀に知多半島や西三河沿岸部の磯にも飛来する。近年三河湾の佐久島でも越冬が観察されているが、その数は多くても1～3羽であり、2000年以降の確認例は1回のみである。

減少の要因として、海域の貧栄養化による海草の減少が指摘されている。

【保全上の留意点】

下水道がほぼ整備され、その終末処理場の排水から窒素やリンをはじめとする栄養塩類の濃度が除去されていることから、植物プランクトンや海藻類が生息できずそれを食べる動物も姿を消していることが指摘されている。

【特記事項】

伊勢・三河湾の貧栄養化により、2010年代半ば頃からアサリの漁獲量が全国1位であった三河湾からアサリが消失したことが問題となっている。同様に海苔の生産量も激減しており、伊勢・三河湾における海苔粗朶の面積は最盛期の1/10にも満たない。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

トラフズク *Asio otus* (Linnaeus)

【評価理由】

本種は中型のフクロウ類で、県内では冬期に耕地の周辺にある疎林に飛来して主に農業に害を及ぼすノネズミ類や小鳥を主食とする農業の益鳥である。1990年代には市街地の神社で10羽を超える記録もあったが、2000年代に入ると多くても2羽以下の記録となり、近年はその確認記録も激減している。このことから愛知県では越冬個体群は絶滅危惧ⅠB類と評価された。

【形態】

全長37cm、雌雄同色で、顔は黄褐色で縦に白色と暗色の線があり、顔の周囲には細く黒い線で縁取りがある。体全体の羽根は黄褐色の地色に黒褐色の縦斑があり、45mm程の長い羽角と橙色の眼が特徴。脚は趾まで黄褐色の羽毛で覆われている。木の枝に止まっていることが多く、警戒した時には体や羽角を細く真っ直ぐ伸ばして木の枝に擬態する。

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に県内全域の平野部にある農地や河川敷などへ飛来して越冬する。丘陵地や農地など開けた場所にある神社の森や緑地の林などを峙として、夜になると農地や草原などの上空を飛び回ってノネズミ類や小鳥などを捕食する。通常は1～2羽で峙をとるが、茶畑が広がる西尾市では1998年に12羽という記録もある。

【国内の分布】

北海道と本州中部以北で局地的に繁殖し、長野県までは繁殖の記録がある他、鳥取県でも記録があるが、愛知県での繁殖記録は無い。冬期は本州中部以南で越冬するが、新潟県や宮城県で越冬するものもいる。

【世界の分布】

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地域に広く分布する。世界には3亜種が分布しており、北方で繁殖するものは冬期に南へ移動するが、ヨーロッパ中南部に分布するものは大きな移動をしないようである。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖地は本州中部以北の低山や平地の社寺林などで、主に針葉樹に営巣し、巣は樹洞やタカの古巣を利用する。繁殖期も越冬期も葉の茂った樹の枝で静止していることが多いので樹の下まで入らないと姿を確認することは困難である。姿を見られたことを知ると直ぐに飛び立って移動することが多いので、その性質を熟知していないと自然な状態を観察することは困難である。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来越冬期の峙は毎年同じ場所を利用する種であるが、近年こうした場所が無くなっており、周辺を探しても見つからないことから生息数が激減しているものと危惧される。農業で殺虫剤や殺鼠剤が使用されることによる餌資源の減少も考えられる。近年は写真撮影が身近な趣味となっているため、一旦生息場所が知られると写真撮影者が殺到することにより、生息できなくなってしまう例も多発している。

【保全上の留意点】

農業の効率化のために殺鼠剤等の使用は致し方無いとしても、危険な残留性をもった殺虫剤や除草剤等の使用には消費者への影響を含め十分な配慮が必要である。また、写真撮影者の弊害を防止するためには生息情報の拡散をしないことや、野生生物の保護に配慮の無い作品に対しては評価をしないという風潮も必要である。

【特記事項】

トラフズクは冬鳥として広い農地などに飛来する。西尾市では広大な丘陵地に茶畑が広がり、1998年にはここに在る神社の森で最大12羽の越冬が確認されていたが、ここにもカメラマンが集まり近年は飛来しなくなってしまった。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

トウネン *Calidris ruficollis* (Pallas)**【評価理由】**

1990年代までの愛知県には広大な干潟や塩田跡、埋立て途中の湿地が広がり国内でも有数のシギ・チドリの生息地であった。当時の湿地には大小無数のシギが生息しており、その中で最も小型のシギであったシギが一歳に満たない幼鳥と思われて「当年」と呼ばれた。当時春秋の渡りでは何千羽と見られたが2010年代後半以降は五百羽程度に激減していることから、愛知県では通過個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長15cmとシギ類の中では最も小さいシギの仲間である。夏羽は顔から胸が赤褐色で頭頂から後首には黒褐色の縦斑がある。上面は赤褐色に黒褐色の斑があり下面は白。春の早い時期には各羽の周辺に白い縁取りがあるが次第に擦り切れて色が濃くなる。冬羽の上面は一様に灰褐色。幼鳥の上面は黄褐色の羽に黒い軸斑があり、背には明瞭な白いV字斑がある。嘴と脚は黒く、嘴は短い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

広い干潟を持つ庄内川河口、汐川河口と境川河口や矢作川河口や矢作古川河口の一色干潟などに春秋の渡りの季節には多数が飛来しており、内陸である安城市や岡崎市、豊田市、豊明市などの河川敷や水田などの湿地でも少数が確認されているが、近年はその数が激減している。

【国内の分布】

春秋の渡りの季節には全国の干潟や湿地で確認される渡り鳥であり、干潟の多くは毎年定期的に飛来する中継地となっていたが、近年は飛来数が激減したことで全く飛来しなくなった場所も多い。西日本では越冬する個体もある。

【世界の分布】

シベリア北東部とアラスカ西部のツンドラで繁殖し、東南アジアやオーストラリアで越冬する。日本はその通過点にあるが、越冬する個体もある。近似種であるヨーロッパトウネンの繁殖や越冬の分布はトウネンの分布の西側に接している。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口の干潟に飛来するが、満潮時に安全に生息や休息ができる後背地と呼ばれる環境が必要で、広大な干潟が存在しても隣接する後背地が無ければシギ・チドリは生息できない。理想的な後背地は干拓地の水田や埋立地の湿地などで、土壌生物が豊富な環境であるが、貯木場の材木の上や広く開けた砂地など、安全に休息できる環境があればシギ・チドリの生息は可能である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年の調査では県内の全てを合計しても500羽程度しか確認されなくなっており、1990年代の何千羽と比較すると1/10程度まで減少しており、越冬の記録も無くなっている。減少の要因は沿岸部の埋立地や干拓地の開発が進んだこと、干拓地内に存在していた池や湿地が全てソーラーパネルで覆われてしまったこと、減反の水田が大豆や麦への転作に変更され農地から湿地が消失したことなどが挙げられる。

【保全上の留意点】

後背地の湿地対策として、干潟に近いある程度広範囲の水田を定めて稲の連作と冬期湛水などを推奨することで餌となる土壌生物の消失を防ぐことが必要である。海域の貧栄養化による干潟の餌資源の消滅を防ぐために、終末処理場における栄養塩類の排出基準を緩和する必要があると指摘されている。海域の貧栄養化による野生生物や人間社会に及ぼす悪影響についての啓発も重要となる。

【特記事項】

シギの仲間は識別が困難で、1970年代までは有効な図鑑さえも無い時代であった。愛知県には鍋田や汐川などの観察適地が残されており、中でもトウネンのような識別が困難な淡水系の小型シギの識別には大きく寄与してきた歴史がある。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii* (Temminck)**【評価理由】**

主に山地の藪に生息する数の少ない種であるが、狩猟鳥に指定されており狩猟圧の高い種でもある。狩猟者の中にはこの種の狩猟を目的としている者が多く、その生息地も熟知されている場合が多い。2010年代までは県内各地の山地で繁殖が確認されていたが、近年はその場所も限られており丘陵地での観察例が激減していることから、愛知県では繁殖・越冬個体群とも準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長雄 125cm、雌 55cm。体型の割に頭が小さく、雄は全身が赤褐色で頭から頸が特に濃く金色の光沢がある。背、翼、胸、腹の羽には白色～淡色の羽縁があり体の下面は上面に比べて色が淡い。眼の周囲に赤い裸出部があり 42～95cm と長い尾には灰白色、黒色、赤褐色の横帯がある。雌は雄より赤味が少なく尾が短い。雌はキジの雌に似ているが全体に赤味があり尾の先が白い。キジの雌の尾の先端は黒っぽい。

【分布の概要】**【県内の分布】**

丘陵地や山地であれば沿岸部から奥三河の県境まで県内の全域に分布し繁殖もしているが、知多半島では記録が無く渥美半島での記録は 1 例のみである。ヤマドリはその体型から飛翔能力が低そうに見えるが、高空を飛んで離れた山から山へ移動することもできる。

【国内の分布】

本州、四国、九州に留鳥として分布する。近畿地方以北に亜種ヤマドリ、本州の温暖地に亜種ウスアカヤマドリ、本州の中国地方と四国に亜種シコクヤマドリ、九州の北部と中部に亜種アカヤマドリ、九州南部に亜種コシジロヤマドリが生息する。

【世界の分布】

本種は日本固有の留鳥であり、国内でも本州、四国、九州以外には分布していない。主に雄の羽色の特徴により 5 亜種に分類されており、南にいくほど赤味が強くなる傾向があるが、コシジロヤマドリは腰および上尾筒が白色である。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県では沿岸部の丘陵地から標高 1,000m 以上の茶臼山高原まで生息が確認されており雑木林などの森林を好んで生息する。繁殖期は 4～7 月で木の根元や土手に窪みをつくり枯れ葉や羽毛を敷いて営巣する。1 腹 7～10 卵で雌のみが抱卵し 24～25 日で孵化する。繁殖期以外は単独か番いで生活し、雄は鳴き声ではなく翼でホロ打ちという羽音を出してなわばり宣言や雌への求愛を行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

従来は県内各地で生息が確認されていたが、近年はその場所が限られる傾向にあり生息数の減少が危惧される。現在も狩猟の対象種であり、剥製や尾羽などの価値はキジとは比較にならないため、この種に集中して狩猟を行うハンターも少なくない。近年捕獲される数や狩猟時の出会い数も減少しているので、狩猟制限等何らかの対策を試みる必要があると考えられる。

【保全上の留意点】

現状のヤマドリについては手遅れとなる前に県内における生息数をより正確に把握するための調査を実施して、必要に応じて保護区の設定や捕獲数の制限を行うことが必要な時期に来ていると思われる。これは狩猟対象種全般に言えることであるが、調査の結果狩猟圧を低減することが必要な時期に来ていると判断された種については必要な保護対策を施すことが望ましい。

【特記事項】

日本の固有種であり、その長い尾は日本の国鳥のキジより長く、昔から狩猟の対象として好まれて来た。年配の猟師が最も好む狩猟鳥であり、手塚治虫の漫画「火の鳥」のモデルともなっている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ヒメアマツバメ *Apus nipalensis* (Hodgson)

【評価理由】

日本では 1967 年に静岡県で初めて繁殖が確認された種で、その後西日本の太平洋岸などへ繁殖分布を拡大している種で、環境省ではリスト外と評価されているが、県内に於ける繁殖分布は局地的で安定していない。イワツバメと同じく人工物で繁殖し、昆虫食でありながら少数の越冬も確認されていることから僅かな環境の変化により絶滅が危惧されることで愛知県では繁殖・越冬個体群とも準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 13cm、翼開長 28cm、雌雄同色で体は黒褐色、下顎から喉は白く背と上部雨覆に青色光沢がある。腰と上尾筒は白く、尾は浅い凹尾。嘴と脚は短く黒色。イワツバメより大きく翼が長く。体の下面は汚白色。アマツバメはより大きく翼が長い。尾はより深い凹尾。イワツバメやコシアカツバメの古巣も利用する。泥やワラで巣をつくり、巣の入り口に羽毛を付けるのがこの種の特徴である。

【分布の概要】

【県内の分布】

1980 年代までは愛知県での繁殖は無いと思われていたが、1992 年 6 月に岡崎市で営巣が確認され、その後豊田市でも確認されている。イワツバメと共に越冬することも多く、越冬しない年もあるが越冬する年は数十羽のイワツバメの群れに数羽が混じることが多い。

【国内の分布】

1929 年 6 月に南大東島で 1 羽が採集されて以後国内での記録が無かったが、1967 年 7 月に静岡市で繁殖が確認され、以降本州の太平洋岸を中心に四国、九州などの温暖な場所で留鳥として繁殖する。西南諸島や北陸地方でもごく少数が繁殖する。

【世界の分布】

アフリカ大陸、ユーラシア大陸南部のヒマラヤ周辺から東南アジア、中国東部や関東地方以西の日本、台湾などに広く留鳥として分布するが、分布は局地的で生息数は多くない。一部は冬期に南へ移動する。

【生息地の環境／生態的特性】

広い河川や海岸に近い市街地に生息し、ビルの軒下や歩道橋の下などで繁殖する。イワツバメやコシアカツバメの古巣にも好んで営巣するが、巣の入り口に羽毛を付ける性質がある。イワツバメも全長 13cm とほぼ同じ大きさであるが、翼の長さはヒメアマツバメの方が遙かに長く、羽ばたきの形もアマツバメ特有のものであるため識別は容易である。秋の渡りではタカの渡りと同じコースを通る。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖は局地的で安定しておらず、毎年越冬する訳でもない。生息数も 2000 年代後半には繁殖期に一カ所で 40 羽という記録もあったが、近年は渡りの季節でも 10 羽以下しか確認されていない。減少の要因は不明であるが、昆虫食なので越冬期の餌不足なども考えられる。温暖化により越冬期の生息条件は良くなっているものと推測されるが、今後の観察に注目していきたい。

【保全上の留意点】

愛知県ではイワツバメと一緒に見られることが多いので、市街地で繁殖するイワツバメの繁殖環境を保全することも大切と思われるが、近年はその生息数も繁殖数も少なくなっているため手の施しようがないというのが現状である。とりあえず現時点では、県内に於ける生息状況についてもっと詳細に調べることから始めなければならない。

【特記事項】

ツバメの亜種であるアカハラツバメを除けば、ツバメと呼ばれる鳥は冬には居ないと思われていたが、近年は越冬するイワツバメの記録も多くなり、それと共存するヒメアマツバメの観察記録も報告されるようになっている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ミヤコドリ *Haematopus ostralegus* Linnaeus**【評価理由】**

県内では数の少ない冬鳥として少数が沿岸部で記録されていたが、2010年代半ばより三河湾で数十羽の群れが見られるようになった。その後佐久島で20羽程の越冬が確認され現在に至っている。国内では東京湾や三重県の伊勢湾などで生息数が増加し、県内で増加した時期は三重県で増加した時期に一致するが、国内でも生息数の少ない種であるため愛知県では越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長45cm。雌雄同色で体は太め、頭部から胸と上面は黒色。嘴は長く赤色で目立つ。腹部から下尾筒は白色で脚はピンク。翼上面は黒く、太い白色の翼帯がある。翼下面は白色。非繁殖羽では嘴先端が暗色になる。幼鳥では上面に褐色味があり、嘴は淡色で先端は黒色。いずれにしても体が大きく目立つ色彩をしているので、識別に困る種ではない。

【分布の概要】**【県内の分布】**

1970年代から三河湾の佐久島では少数が生息していたようであるが、近年は伊勢湾の三重県沿岸で数を増しており、その一部が伊勢湾の鍋田や三河湾にも飛来していると思われる。県内では佐久島で多い時には20羽以上が見られるが、その一部が一色干潟へも飛来して、2014年3月には55羽の記録がある。

【国内の分布】

1960年代までの国内では迷鳥とされていたが、近年は冬鳥として東京湾や三重県沿岸で数が増えており、三重県に飛来する一部の個体が三河湾などにも飛来しているようである。三重県では2017年3月に津市で63羽という記録がある。

【世界の分布】

14亜種があり、ヨーロッパ、アジア東部、カムチャツカ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南北アメリカなどに分布する。日本に飛来する亜種はカムチャツカか沿海州で繁殖するものと思われる。

【生息地の環境／生態的特性】

東京湾や三重県、三河湾に生息する個体群は干潟でアサリなどの二枚貝を食べているが、かつて佐久島に生息していた個体群は岩礁に生息していたことから岩礁に付いたカキを食べていたと思われる。ミヤコドリの英名が **Oyster catcher** であることから、佐久島の個体は本来の食性であるカキを食べる種であった可能性がある。現在の佐久島の個体群は岩礁でも干潟でも採餌しているようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在国内で見られるミヤコドリは干潟でアサリなどの二枚貝を食べるものが大半のようであるが、佐久島で生息していたカキを食べる個体群が現在も存在しているのであれば国内ではかなり希少な存在であるといえる。これからその食性について観察を続けることでその系統が分かれば日本でも新しい発見であると言える。

【保全上の留意点】

佐久島で生息していたカキを食べる個体群が現在も存在しているのであれば国内ではかなり希少な存在であるといえる。今後は佐久島の個体だけでなく、愛知県全体のミヤコドリについてもその食性の調査を行う価値はあると思われる。

【特記事項】

貝を主食とする水鳥は、食べる貝の種類によって嘴の形も異なると言われていた。英名の **Oyster catcher** の通り、本来は岩場に多いカキを食べるものと思われていたが、近年国内で多くなってきた個体は全てアサリなど干潟の二枚貝を食べている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ムナグロ *Pluvialis fulva* (Gmelin)**【評価理由】**

国内では春秋の渡りの季節に通過する旅鳥とされているが、愛知県では沿岸部で少数が越冬する。県内での生息数は春の渡りに多く、秋の渡りでは少ない傾向がある。春の渡りでは内陸部を渡っていることも考えられ、沿岸部だけでなく内陸部にある湿田や山地部の湿原で確認されることもあるが、近年はその数も激減しているため愛知県では越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約 24cm で中型のチドリである。雌雄同色で夏羽では頭頂から体の上面は黒色と黄褐色のまだら状であり、顔から腹までの体下面は黒色で体上面との境は眉斑から脇までは白線が続く。冬羽は下面が灰褐色で、頸から胸に褐色の淡い縦斑がある。嘴は黒、脚は暗灰色、幼鳥は冬羽に似るが、上面の黄褐色味が少なく、下面は脇から腹まで褐色の斑がある。

【分布の概要】**【県内の分布】**

渡りの季節に木曽川や矢作川、汐川、伊川津などの河口周辺に飛来するが、塩水よりも淡水を好むため、干潟よりその周辺の水田や草原で見られることが多く、県内では越冬するものも少なくない。2010 年頃までは 1 群 100 羽を超える群れも見られたが、近年は多くても 60 羽程度に減少している。渡りの季節には内陸の豊田市や岡崎市などにある湿田でも見られ、新城市の長ノ山湿原で見られることもある。

【国内の分布】

国内では旅鳥として全国の沿岸部に飛来するが、内陸を通過する個体も少なくないようである。本州中部以南で越冬することが知られている。

【世界の分布】

2 亜種があり、シベリアとアメリカ西部のツンドラで繁殖し、南アジア、オーストラリア、熱帯太平洋で越冬する。世界には近似種としてヨーロッパムナグロとアメリカムナグロがいるが、日本では迷鳥であり別種である。

【生息地の環境／生態的特性】

国内にはよく似た種としてダイゼンがあるが、ダイゼンの生息環境が干潟であるのに対し、ムナグロは淡水の湿地環境を好む。近年沿岸部の湿田が乾燥化したことにより、稀に干潟に入る個体を見ることもあるが、基本的にムナグロの生息環境は淡水の湿地や乾燥した草地である。越冬の時もこうした環境を好み、海岸のテトラポットで群れるようになるのは渡去が近くなってからである。

【現在の生息状況／減少の要因】

2001 年には豊橋の神野新田で 66 羽、2004 年の春には海部郡で 400 羽の群れも見られたが、2022 年以降は 20 羽を超える群れが見られなくなった。減少の要因は沿岸部に存在した埋立地や養魚池などの淡水湿地が埋められソーラーパネルで覆われたことや、減反で湿地が多かった水田が麦や大豆への転作に変わったことにより沿岸部から湿田や湿地の環境が消失したことによる。

【保全上の留意点】

淡水湿地の環境を確保する以外に方法は無いので、埋め立て地の遊休地に浅い淡水湿地を再現すること、干拓地内にある程度の面積の水田を確保して稲の連作を奨励することで、冬期湛水する湿田の環境を再現すること、などの対策を急ぐべきである。ソーラーパネルを取り払うことは無理であるが、新しく養魚場跡になりそうな環境を確保することも大切であろう。

【特記事項】

近年の沿岸部から淡水湿地の環境が消失している現状に注目して、早急な対策が講じられなければ、かつてシギ・チドリをはじめとする水鳥の天国と呼ばれた愛知県からもこうした絶滅危惧種は姿を消すことになる。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

オオセグロカモメ *Larus schistisagus* Stejneger**【評価理由】**

主に冬期、伊勢・三河湾や外洋に飛来して生息するが、ユリカモメやカモメの仲間の大群の中に同じく大型かもめであるセグロカモメと共に数十羽が見られる程度である。西尾市沿岸の三河湾では比較的多く見られるが、最大でも 200 羽余りである。夏期には越冬する幼鳥や若鳥も見られたが、近年は他のカモメと同様に激減し環境省で準絶滅危惧とされたので、愛知県も越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約 64cm。雌雄同色の大型カモメ。頭部から下面は白く、嘴は大きく黄色で下嘴の先端付近に赤色斑がある。背と翼上面は濃い灰黒色で最外初列二枚の黒斑の内側および風切各羽の先端が白い。尾は白く、脚はピンク。非繁殖羽では頭部から頸にかけて灰褐色の羽毛が混じる。第 1 回冬羽は全身灰褐色で嘴は黒色。翼上面の雨覆と風切の濃淡差は小さく、尾は一樣に灰褐色。大型カモメの中で最も背の色が濃い。

【分布の概要】**【県内の分布】**

冬期の一斉調査では幡豆町の海岸で 200 羽を超える記録もあるが、県内の通常の干潟では多くても 20 羽程度である。夏期には繁殖地に戻っても繁殖できない若鳥が他のカモメ類の若鳥と一緒に干潟や埋め立て地の湿地などで越冬する姿を見ることが普通であったが、近年の酷暑では、夏期には確認されなくなってしまった。

【国内の分布】

日本では 5～8 月に北海道から青森県や岩手県など本州北部の海岸や島の断崖などで集団繁殖し、冬期は日本全国から九州まで南下して越冬するものもいる。

【世界の分布】

アジア東部のみに分布する。カムチャツカやコマンドル諸島、千島、ウスリー、サハリン、北海道、本州北部などの沿岸で繁殖し、冬は本州、四国、九州、伊豆諸島、沖縄、中国の東海岸で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河口などに生息し、雑食性で魚類や甲殻類、海産小動物などを食べるが、愛知県では内陸にある岡崎市の矢作川で観察されたことがあり、他のカモメ類と同様にスカベンジャーとして川や海に捨てられた生ゴミなども食べるのであろう。ただし内陸で見られたのは一度だけなので、セグロカモメと比較すればより海水を好む種であることが分かる。繁殖地では他の鳥の巣を襲ってそのヒナなども食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息数が激減しているのは温暖化の影響と思われるが、今後も調査を続けなければ正確なことは分からない。ただし、冬鳥である他のカモメ類やカモ類も激減していることに間違いはないので、今後も調査をしっかりとっていくことは重要である。

【保全上の留意点】

絶滅危惧種を絶滅から守るために、今すぐ地球の温暖化を防止する対策をとることが重要である。加えて生息環境である湿地の確保も重要であり、このままの状態では推移すれば消滅する野生生物は増え続けることになる。

【特記事項】

大型カモメの仲間にはシロカモメ、ワシカモメ、オオセグロカモメ、セグロカモメの 4 種がある。近年セグロカモメが幾つかの種に分割されてはいるものの、オオセグロカモメは東アジアだけに分布する唯一の固有種である。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第 8 版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

コウノトリ *Ciconia boyciana* Swinhoe

【評価理由】

国内に野生で繁殖する個体は1960年代に絶滅したが、愛知県では大陸から越冬のために飛来したと思われる野生個体が1982年まで確認されている。環境省では国内で人工増殖して放鳥した個体を含め絶滅危惧ⅠA類と評価しているが、近年愛知県でも脚環や発信器を装着された個体が増加しており、雄同士での営巣行動なども確認されていることから、愛知県では越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長112cm、雌雄同色。大型の水鳥で全身が白色、虹彩は黄白色で顔の皮膚は赤色。嘴は黒く、太く長くて先端は尖る。風切と大雨覆は黒色で脚は長く赤色。ツル類に似るが嘴や頭、頸や体がツル類より太く重量感がある。コウノトリは樹上に営巣するが、地上で営巣するツル類には木の枝に止まる性質が無いので、日本画に描かれている「松に鶴」のモデルはこのコウノトリと言われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張、西三河、東三河の平野部や知多半島、渥美半島などで確認されているが、2009年以降は全て人工繁殖の個体やその子孫が飛来している。2024年4月26日には平野部ではなく新城市作手の長ノ山湿原でも1羽を確認したことで、国内でも内陸の山地の上空も移動していることが判明した。

【国内の分布】

現在は人為的に導入された種ということで「日本鳥類目録」にはその分布が記されていないので詳細は不明であるが、野生個体は江戸時代まで日本の各地に留鳥として普通に生息していたとされている。

【世界の分布】

ウスリー、アムールから中国東北部および日本で繁殖し、主に中国東部で越冬するとされている。2000年以前に日本に飛来した冬鳥の個体はそこで繁殖した個体であると推測される。国内では2005年から人工繁殖させた個体の放鳥事業が行われている。

【生息地の環境／生態的特性】

農耕地、河川、湿地などに生息し雑食性で魚類、両生類、軟体類を好む。本来は松などの大木に樹枝などで大きな巣をつくって繁殖し、昔は社寺林に大きなコロニーをつくって繁殖していたと言われているが、近年ではコロニーは確認されていない。また近年は樹木の他に電柱などでも営巣を始めたために、営巣用の専用櫓などを設置してそこに誘導する対策も取られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

1971年に野生個体が絶滅し、2005年から人工飼育個体の放鳥が始まった。日本鳥類目録では国内移入種とされたことで国内に於ける現在の生息状況の詳細は不明であるが、野生種が絶滅したのは明治以降の乱獲と農薬による影響が最大の要因であることに間違いは無い。農薬による影響はコウノトリへの直接の影響だけでなく、餌生物の消失による二次的な被害も大きいので、こうした要因の分析は今後も必要となる。

【保全上の留意点】

前項でも述べたが、人間活動の結果として現在の環境があり、野生生物は全てそれに順応して現在の生態系が形成されてきた。近年急に環境問題が台頭したことでカーボンフリーやSDGSが環境問題解決のための最善策とされているが、メガソーラーや風力発電等は、その環境に順応してきた野生生物には大きな脅威である。

【特記事項】

ユーラシア大陸に3亜種が繁殖分布しており、西端のヨーロッパに分布する亜種は体がやや小さく、嘴が赤いのでシュバシコウと呼ばれる。子供を運んで来るといった縁起の良い話になっているのはこのシュバシコウである。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.
鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.
愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.
日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* (Linnaeus)**【評価理由】**

県内では沿岸部から低山帯まで普通に見られ、沿岸部や丘陵地の水辺ではアマサギやコサギと共に集団繁殖しており、サギの仲間ではコサギと共に最も生息数の多いサギとされていた。2010年までは一カ所で100羽以上の記録があり、1994年には一色沿岸だけで4,000羽の記録もあったが、その後激減して近年では姿を見ることも困難な状態になったために、愛知県では繁殖・越冬個体群とも準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長57.5cm、雌雄同色で頭頂から背、肩羽は紺色で、後頭には細く白い飾羽が2本ある。額から眼の上までは白い。翼と腰、尾は灰色。体の下面は白く、測頸から脇は灰色みを帯びる。嘴は黒、脚は黄色。眼先は青灰色で虹彩は赤。幼鳥は全体に褐色で、白色やバフ色の斑が密にあり、「ホシゴイ」と呼ばれる。夜行性で飛びながら「クアッ」と鳴くので「夜ガラス」と呼ばれることもある。

【分布の概要】**【県内の分布】**

標高の高い地域では少ない種で、県内平野部周辺の全域でコサギと共に普通に見られる中型のサギであった。丘陵地や平地の林で中型や小型のコサギやチュウサギ、アマサギと共に集団繁殖していたが、近年こうした小規模の集団繁殖地は消滅傾向にあり、現在の集団繁殖地では大型のアオサギやダイサギが優先種となっている。

【国内の分布】

本州から九州で繁殖し東北地方以北では夏鳥、本州中部以南では留鳥、西南諸島では冬鳥である。愛知県に分布するものは留鳥とされていたので、各個体が夏鳥であるのか冬鳥であるのかといった調査はこれまでなされてこなかった。

【世界の分布】

ユーラシア大陸、アフリカ大陸、南北アメリカ大陸の温帯から熱帯地方に広く分布する。東アジアでは日本の他に朝鮮半島や中国東部で繁殖し、大陸で繁殖するものはインドや東南アジアで越冬する。日本で繁殖する個体群の中にも南下するものがある。

【生息地の環境／生態的特性】

基本的には夜行性であるが昼間に活動するものも多い。主に昼間は薄暗い森や茂った竹藪などで休息し、夕方から水辺に出て魚やザリガニなどを捕食する。群れで居ることを好み、同種やコサギなどと群れ、繁殖も中型や小型のサギと一緒にコロニーで行うことが多い。日本では留鳥で渡りは行わないと思われていたが、冬期にフィリピンや中国南部に渡るものも少なくないことが標識調査で明らかになっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前はコサギやアマサギなどと共に知多半島の鵜の山などの大型コロニーで普通に繁殖していたが、近年はより大型のアオサギやダイサギが増加したことで、ここで繁殖する個体は殆ど見られなくなっている。県内の各地の平地や丘陵地にある水辺の周辺でゴイサギを含む中型や小型のサギのコロニーができることもあったが、継続は難しいようで、近年はこうしたコロニーを見ることも無くなっている。

【保全上の留意点】

かつては養殖漁業の害鳥として駆除の対象となった種でもあったことで、単純にその生息数の増加に注力することには考慮も必要ではあるが、1977年の愛知県の定点調査の合計が1,500羽を超える生息数であったものが、現在では100あるいはそれ以下にまで減少していることは大きな問題として考えなければならないが、当面はこうした調査を継続してその対策を科学的に考慮することが重要と思われる。

【特記事項】

平家物語の中で後醍醐天皇の命じで捕らえられたということで五位の位を与えられたという故事がその名の由来である。このように古来人の身近で普通に生息していたサギであったが、近年はアオサギやダイサギが身近なサギとなっている。

【関連文献】

黒田長久(編), 1984. 決定版 生物大図鑑 鳥類, 399pp. 世界文化社, 東京.

鈴木 豊, 1973. 西尾市の生物 野鳥, 西尾市史史料IV, 416pp. 西尾市.

愛知県農地林務部自然保護課, 1983. 愛知の野鳥, 332pp. 愛知県, 名古屋.

日本鳥学会目録編集委員会(編), 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.

(執筆者 高橋伸夫)